

久留米大学を受診した患者さんへ

「Levofloxacin 単剤投与が診断のきっかけとなった粟粒結核の一例 “Miliary Tuberculosis noticed by the efficacy of levofloxacin monotherapy.”」の研究に使用する試料について

この研究では、久留米大学を受診し、手術・検査の際に採取し保存されている以下の試料を使用します。

- 1) 期間：2014年5月から2014年6月
 - 2) 受診科：感染制御部など複数科
 - 3) 対象疾患名：粟粒結核
 - 4) 使用する試料：診療記録、レントゲン、CT、病理像など
-

あなたの試料を今後の医学の進歩のために研究に使用させていただきたくお願い申し上げます。研究の内容の詳細は以下のとおりです。

研究内容をよくお読みになり、もし研究にご協力いただけない場合は、お手数ですが下記の連絡先までご連絡ください。

研究ご協力の撤回受付は研究成果の公表前までとなります。
ご了承いただけますよう、お願い申し上げます。

1) 研究組織：

所属：久留米大学 感染制御学講座

研究代表者：久留米大学 感染制御学講座 教授 渡邊 浩

研究分担者：

久留米大学病院 感染制御部 助教 八板 謙一郎

講師 升永 憲治

久留米大学病院 薬剤部 副主任 酒井 義朗

久留米大学病院 内科学講座呼吸器・神経・膠原病内科学部門

助教 中村 雅之

久留米大学病院 内科学講座心臓・血管部門

助教 大島 英樹

久留米大学病院 高度救急救命センターCCU

助教 林 真貴子

助教 植田 晋一郎

2) 研究の意義と目的：結核は現在でも診断に苦慮する疾患です。また、一般的に抗菌薬として使用されるクラビット®（レボフロキサシン）も効果があることが知られており、過去にもこれにより診断が遅れたケースや薬剤耐性が誘導されたケースが報告されています。今回は治らない肺炎（non-resolving pneumonia）としてクラビット®（レボフロキサシン）が使用され、速やかに解熱しましたが、骨髄穿刺や胃液からの遺伝子検査で結核の診断が確定した症例を経験しました。骨髄にまでいたった粟粒結核という重症結核であってもクラビット®単剤で速やかに解熱をみることがあること、またその有効性から結核を疑わねばならないことが教育的であると考えたため、報告します。

3) 研究の方法：後ろ向き研究（症例報告）

4) 研究期間：平成 26 年 9 月倫理委員会承認後～平成 29 年 9 月

5) 上記の試料の使用を選定した理由：クラビット®単剤の安易な使用を忌避するという啓蒙のため有効であると判断しました。

6) プライバシー保護・人権保護・倫理的配慮について：名前、イニシャル、住所、正確な入院の日付について記載はしません。

7) 研究成果の発表の方法：症例報告として学会や論文形式で発表します。

8) その他：特記事項なし

9) 事務局、問い合わせ、連絡先：

久留米大学病院感染制御部 助教 八板 謙一郎

研究番号 14135